

パオロ・ロッシは、『哲学者と機械』において十六世紀という時代を次のように説明している。

この時代には、ヨーロッパ文化のもっとも進歩的な代表者すべてにおいて、文学もしくは修辭学を重視する教育の代わりに、技術的訓練や職業的養成を重視するような型に取って代えようとする傾向が存在した。<sup>1)</sup>

机上の学問から手による技の方への移行である。つまり職人や技術者の仕事のありように文化的意義のあることが改めて確認されたわけで、いわゆる教養人は有用性をもたらす根本たる技術の実践面に対する昔ながらの輕視を棄てて、実用性を主軸とした技芸に注目していくことになる。

換言すれば、経験の重視、現実の觀察、実践への着目が芽生えてきたことになるうか。やがてこの彼方に科学技術の光輪の一端が見えてくるのではないかと推察される。

#### 接点

これまでパルミエーリの『市民生活論』を基調にして、その中から有用性Vの概念を引き出して行動的生活と瞑想的生活に含まれる、営みとしての生活という共通部分を考え、さらに二つの生活を結びつける契機となつた有用性の意義を、理念と実践の結合との観点から考えてもみた。

ところで、行動的生活や瞑想的生活を送つたのは、人文主義者Vであり、技術を担つたのは職人Vである。この二つのタイプは対立の關係にあつたが、その対置は「ある特定の人々に対しては、またフィレンツェという環境に対しては意味がない」とロッシは述べている。

ダ・ヴィンチにおいて両者が結合しているからだと言う。それは職人を市民階級へ移行させることによって、彼らに社会的地位を与え、「社会的に上位の、宮廷や君主への奉仕Vに直結している文化の中に吸収」してしまつたからだ、とロッシは論を進めている。

確かにそうかもしれない。しかしここには技術や実験や觀察を有用とみなす有用性尊重の意識が根深く介在しているように思われる。

有用性を価値ありとする思潮が先か、有用性がおのずと力を得てその存在意義を認めさせたのが先かは定かではない。

けれども有用性（技術—手仕事）自体は古代や中世から連続と続いているのであり、それがルネサンス期において意識的に採り上げられたことは間違ひなく、その意味ではまさにルネサンスにおいて有用性の位置は新展開を見せたと思われる。すなわち有用性に経済的効用の意味が新たに加わつたのである。

仮に理念と実践のうち、理念面を科学として実践面を生活とした場合、この両者を繋ぐのは技術である。科学者の持つ科学の知の中の有用な面と生活の中の有用性が、それぞれ手を伸ばして握手する図を想い描いてほしい。有用性を契機として両者は結合しており、それは行動的生活と瞑想的生活の接点と同じ有用性なのである。

ルネサンス期においては営みとしての生活にまできちんと目は向けられていて、生活世界の意識的構築が「人達によって人間に与えられ」るもの（パルミエーリ）を軸としてなされていくのである。

#### 6 ム徳性Vの驛り

#### 徳と力量

第一章でも取り上げた十三世紀末に編まれたトスカーナ語による初めての説話集『ノヴェッリーノ』の第六十八話は、「ある若者がアリストレスに尋ねた質問」と題されていて、以下のような内容となっている。

偉大な哲学者であるアリストテレスの許に、ある日、ただならぬ悩みを抱いた青年がやって来る。

「先生、ぼくは心からがっかりする不快なものを目にしました。齢を重ねた人間がきちがいじみた行いをしたのです。年をとるということが過ちを生むことならば、老いて破廉恥な行為をする前に、若くして死んだ方がましです。後生です先生、よろしければお教えを乞いたいです」

アリストテレスは次のように応えた。

「老いて本性が虚弱にならないとは言えない。若さは薄れ、理性の力もなくなるものだ。そこで君にきちんとした心構えがあるのなら、力になって教えてあげよう。こうしてはどうか。つまり、若いときに素晴らしいこと、良いと思うこと、高潔なことを次から次へとやって、その反対のことをせぬよう注意を怠らぬことだ。そうして年をとったときには、君の性分や理性で過ちのない暮らしを送るのでなく、君が年齢を重ねて培った、素晴らしい習慣で生活することだよ」

(傍点——訳者澤井)

傍点の部分は時間をかけて養われた習慣を指しているが、要するに、徳の涵養を意味しており、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』に基づいた認識である。

同書第二巻第一章で徳は二色に分類されている。一つは思考の働きとしてのもので、教育に負う。一つは人柄としてのもので、習慣に負う。教育による徳を理性的な徳とすれば、習慣による徳は人格的な徳と呼んでもよいであろう。ともに人間が獸的な存在を脱して動物的(本能的)でもあるが同時に理性的な存在、つまり人間としての卓拔さを会得している状態を徳があると言うわけである。

徳の内実が何であるかは時代や社会によって異なってくる。時代や社会の価値観に左右されつつも、最も卓越したものが徳とみなされる。

たとえば古代ギリシアのポリス社会では、知恵・勇気・節制・正義の四元徳(四つの基本的で根幹となる徳)であり、中世キリスト教社会では四元徳に信仰・希望・愛がプラスされて七元徳となった。

先の引用文ではこうした徳の修養が、アリストテレスから迷える青年に伝授される形式を採っている。十三世紀末にこうした小話を編纂しなければならなかったのは、ひとえに四元徳なり七元徳なり、いわゆる徳性の概念がぐらついてきたことが原因の一つに挙げられるであろう。もとより『ノヴェッリーノ』の成立理由もそうした危機意識にあって、徳の教導の再確認が大きなモチーフのひとつであった。古き良き時代への郷愁のようなものも感じられる。

と言うのも時代は動きつつあったからである。七元徳は否定せずむしろその存続を容認しながら、ルネサンス的徳なるものが姿をゆっくりと現わしてくる。

ルネサンス的と記したのはほかでもない、ルネサンス期になって徳の原義が再認識され、根源的な意味において用いられるようになったからである。古代復興の一環と見てもよいが、始源への意味論的回帰と言った方が正鵠を射ているかもしれない。

徳のギリシア語はアレテ(ἀρετή)、ラテン語はウィルトゥス(virtus)であるが、これはもともと、徳というよりは、器量と訳した方がよいとされる。徳の訳語は多分に道徳的・倫理的意味合いが濃厚となるが、アレテ(ウィルトゥス)は本来、人や動物に具わっている力量を示している。眼のアレテは眼を立派にし、眼の働きを立派にし、「人間のアレテについても、それはそれに基づいてひとが善い人間になり、また、それに基づいてひとが自分の働きの良いものとして発揮するような、そういう性向のこと」を言う。

また期せずしてアレテは軍神を意味するアレス(ἀρετή)と同根であり、ウィルトゥスは男を意味するウィル(vir)と同根である。したがって軍神や男に本質的に宿っている力、強さ、意志力、精神力、勇気、才幹などが好ましい状態で発揮されるとき、それはそのまま人間や動物の器量となる。

何事かを完遂しなんらかの成果を生み出す技倆を持っているものは、器量において秀でてしているわけである。

これが人間の道徳面でも考察されたのがいわゆる徳という語で一括される徳目で、古代・中世とどちらがずっと主流を占めてきた。しかしルネサンス期になって、器量というアレテ本来の語義も取り上げられるようになり、ルネサンスの人間観を特徴づける最も有力な言葉となる。身体的にも精神的にも男性的な力あふれる当時の代表的な人間を形容するのに、その人間の雅量にも及びうる言葉として、イタリア語化されたヴィルトゥ（*virtù*）は最適だったに違いない。

ヴィルトゥは時代や社会によって異なるが、卓越性を示す語であることは前述の通りである。ルネサンス期には力量Vが人間の優秀さを表現した。換言すれば、力量が問われる時代（乱世）がルネサンス期だとも言える。ヴィルトゥ

早台点してはならぬが、ルネサンス期にヴィルトゥは力量だけを意味したのではなく、道徳としてのヴィルトゥも意味していたのは言うまでもない。ただ力点が力量の方に強く置かれたのである。そして力量は政治と深く関係していた。

ここにヴィルトゥは従来の道徳哲学の面と政治哲学の面との二通りに分かれた。ヴィルトゥをこのように二分した立役者はマキアヴェッリである。と言うよりも彼は、神的・倫理的秩序と一体化していた政治的営為を解体して、政治に自律性をもたらしたと言った方がよいであろう。政治にいちいち倫理を求めたらやっつけられない時代になってきたのである。

マキアヴェッリのヴィルトゥ観には後で触れることにして、ヴィルトゥの勝利を明言した文を引いてみたい。時代は十五世紀で、教皇庁の尚書院長にもなったパオロ・コルテーゼ著『博識な人びとの対話論』（一四八九年）からの引用である。同書はダンテから十五世紀末までのラテン語文書に対する批評の草分け的著作とされている。

おお、大ロレンツォよ、私は、偉業も、天賦の才のおかげで光の投ぜられた諸研究も、同時代の卓越した天才たちも称讃するのを怠らない。実際、イタリアを異邦人の長い抑圧から解放放つことで、信じられぬくらい多くの人たちがあらゆる偉大な学芸を崇拜するに至った。当代の君主たちは諸研究に尽力を惜しまなかったで、見捨てられていた学問を庇護したと言われた。そうした偉人とは貴下の祖父君、父君であって、教習あふれる人たちなのである。彼らはあらゆる器量において秀逸で、天才たちを蘇らせる功績では人後に落ちない。こうした榮譽を担った優れた勝者たる貴下は、天才的な人間研究を高揚させたのみならず、心を碎き時間をかけて自由学芸の優雅さに身を挺した。そして正当な学問的を立てを優秀な本性に与え、厄介な、力と知とを結び合わせた。それゆえ貴下は文字通り俊才中の俊才なのである。これは手放しで褒めてよい。事実、いまだ若年の折りに共和国を委ねられた貴下は、市民の救済と、内乱の災禍やゆしき災難から共和国の生命を救うことに余念なく、結果として共和国に秩序をもたらしてくれた。これはやはり高潔な意志の充分確かな証であり、貴下の寛大さの証左でもあるが、運命よりもむしろ力量が貴下を目標へと導いたのかとも思う。目下のところ、歳月と艱難辛苦を経て貴下は共和国を救いもし拡張もしたのだから、支配ということを考えてみて、運命よりはむしろ力量を拠としているとみなしてもよいのではなからうか。

フィレンツェに黄金時代を築き上げたロレンツォ・イル・マニフィコへの頌詞であり、大ロレンツォが運命よりも力量によって功成り名を遂げたことを称えている。

そしてここで「運命」(Fortuna)が登場する。これまであえて運命については触れなかったが、ヴィルトゥとフォルトゥナは対句のように頻繁に出てくるルネサンス期の術語である。極論となるが、この二語の相関関係でルネサンス期の社会や歴史を語ることも可能である。

運命が人間の力ではどうしようもできない、人間の側から見て非合理的なもの（その非合理性をなんとか合理的に考えようとして、天体の動きに合理性・数学性を求めて占いとされたのが占星術と言えよう）であるに對し、力量の方は人間の裡の本来的に優れた部分を信ずることで自己実現をしていかんとするいわゆる技倆を指している、きわめて建設的である。一般的にルネサンス期の人文主義者はこうした前向きな楽観主義を有していて、運命あるいは生の非合理性に對抗せねばならぬときには、この姿勢を堅持して事に当たった。

とはいえ、引用のパオロ・コルテーゼの場合、運命が力量に對抗しうる存在として見られていたかどうかは疑問である。力量に對して修辭的に運命（幸運）を引き合いに出してきているように思われてならない。

大ロレンツォの時代のフィレンツェは久方ぶりの安定期を迎えており、フィチノ、ピッコ・デッラ・ミランダなど優れた思想家・文人が輩出したルネサンス文化の絶頂期であった。この良き時代を導いたのは、大ロレンツォの力量であって幸運の賜物ではない、と断言できるほどの確信が著者にあり、またそうした氣運が世にみなぎってもいた。

ちなみにダ・ヴィンチと並称される万能人レオン・バッティスタ・アルベルティも、フォルトゥナよりもヴィルトゥを称揚している。

#### フォルトゥナ

先に運命は非合理的で人智では制御しきれないと書いた。しかしもう少し議論を深めてみると、非合理的な力だけではまだ運命とは命名できず、力を目前にして不可抗力を身内に覚えたときに初めて、人間は運命を意識すると考えられる。不可抗力に理性的に對処するにつれて、對処する側にある種の認識が沈殿していき、それが運命の名の下に結実していく。それゆえ對処する側に必要なのは意志力というきわめて心理的な事象であって、そこに運命と人間意志との拮抗作用が生じてくる。

中世末期ダンテはフォルトゥナを固有な存在者とみなして擬人化し、天球を動かし祝福をもたらすものとした（『神曲』地獄篇、第八歌）。また『煉獄篇』第十六歌では、人間の自由意志が天球（星辰）の影響に打ち克ちうることを力強く訴えている。これは占星術的発想に對抗して人間の自由意志の氣高さを主張し、占星術からの解放を唱えることと同義である。

ダンテおよびペトルルカは、人間の自由意志を窒息死させて人間精神の無尽蔵な創造性を否定せんとするものには、熾烈な反駁を試みた。

とりわけペトルルカは、イギリスの唯名論、アラブの医学、宿命論などの思潮には断固たる態度を取った。フランチェスコ・ブルニ宛書簡に、「運命は星辰の動きの中にあるのではなく、神の意志は自然因の中にある」（一三六二年）と書いており、神だけが人間の抱く自由意志の何たるかを知っているわけである。彼は、いかに人間の力量と理性が運命の過酷な要求に耐えうるかを自覚的に捉えようとした。

すでにペストの席捲を経たイタリアでは当然の運命観とも言えよう。ボッカッチョの『デカメロン』第二目録は、「さまざまな困難の果てに囚らざしあわせな結末に達した人物」が主人公に据えられるが、このモチーフがペトルルカの自覚の延長上にあることは明瞭である。

続くサルターティ、ボッジョ・ブラッチョリニにしてもこの自覚の上に立って、人間の自由な活動を称揚して運命に後退を促している。サルターティは神の存在を第一義として運命は第二義的原因であって、存在の根本的性質や特定の因果性を変えるものではないと考え、あくまで人間の個人的意志や責任の重要性を説いた。

ボッジョは人間の成長に視点を据えて運命との関わりを考えている。つまり幼少の頃は心身ともに力が具わっていないから運命の力に翻弄されやすいが、年齢を重ねるにつれ道徳面でも知力の面でも力を蓄えていくと、運命の方が遠のいていく、というわけである。最後には力量と精勵によって星辰の影響力をもはねのけることができるとする。

運命に対してこのように人間の力を圧倒的に対比させる、いやさせうるのは時代の△勢い▽、△気運▽と言ってもさしつかえないと思う。わけでも運命の寓意像にもこの変化は顕著である。中世において運命は、運命の車輪を手にした女性として描き出されており、しかもその車輪は無力な人間を操りうるものでもあった。それに対してルネサンス初期では打って変わって、運命は船の帆を操る女性となり、しかも舵は人間が握っているという具合である。つまり中世では運の善し悪しの決定権は運命の女神の掌中に握られていたわけだが、ルネサンス初期では人間にも運命を操作する可能性が与えられたことが理解できる。

こうした気運は大ロレンツォの世のフィレンツェに生きた、フィレンツェ・プラトン主義の一方の旗頭ピーコの次の言葉に集約されるであろう。

精神の驚異は天より大である。∴地上には人間以外に偉大なものはなく、人間のうちにはその精神や魂をほかにして偉大なものはない。君が精神と魂へと高まるならば、君は天をも越えて高昇するのである。

ルネサンス初期の知識人にとって運命の強さは、意志の堅い人間によって打ち負かされないほどに大きいものではなかった。人間は運命に一蹴されないように自己の徳性に磨きをかけていけばよかつたのである。

#### 共振的円環

△黄金の知の世紀▽と讃美された十五世紀の精華たるフィレンツェの実質的終焉は、一四九二年の大ロレンツォの死で決定的となる。後継者のピエロ・デ・メディチは無能で、九四年八月のフランス王シャルル八世の南下とともに、フィレンツェを追放される。同市は九四年秋から九七年冬までサヴォナローラによる神権政治が敷かれる。メディチ家は一五二二年に一時フィレンツェに復帰し、二七年に再び追放の憂き目に遭う。

十五世紀末から十六世紀前半にかけての四十年にも満たないこの時期は、フィレンツェにとってもイタリアにとっても試練の時期であり、この間とりわけフィレンツェ統治に最善策を論じた政治書が続出した。マキアヴェッリの『君主論』(Il principe 一五二三年)も、『ディスコルシ』(ティトウス・リウィウスの初篇十章に基づく論考)』(Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio 一五二七年)も同期の産物である。

ところで波乱に満ちた十六世紀はしばしば、二元的見地から照明が当てられる。たとえば理性と情念、人間と野獣、エリートと大衆、富と貧、秩序と無秩序、そして力量と運命というふうだ。この方法は鈍で得た切り口を見るように、きわめて大局的で説得力に富み輪郭のはっきりした把握が可能である。

力量と運命の対立抗争として時代を捉えることで、両者の反目の原因を追求説明して理想的な理解に至るのも一つの方法であろう。だがこれから『君主論』や『ディスコルシ』を手掛かりにしてマキアヴェッリのヴィルトゥとフォルトゥナを見ていくと判ってくるのだが、二元的にそれほどすっぱり割り切れるものではない。結論めくが、力量と運命はむしろ表裏一体・共振の関係にあると解した方がいっそう適切かとも思われる。外側から対立し合う二項ではなく、内部で背中合わせになっている存在である。そしてマキアヴェッリの意識では、あくまで力量の方に重点が置かれていて、力量が運命の域に割り込んで力量による幸運を呼び寄せるとみなされている。

たとえば『君主論』第十八章、「君主は運命の風向きと事態の変化とが命ずるところに従って、変幻自在の気構えを持つことが必要である」とある。この君主とはもちろん真の力量をきちんと具えた君主であり、必要から効果を生み出しうる人間のことである。つまり君主の力量(変幻自在な気構え)が運命の気まぐれを克服し、栄光をわがものとするわけである。

また第二十五章には、「仮に運命が人間の活動の半分を思いのままに裁定することができるとしても、少なくとも後の半分か、また半分近くは、運命もわれわれの支配に任せていると見るのが真実であろうと私は考え

……とあって、こういうことをきちんと認識して力量と運命のバランスを身内で保っているのが真に力量のある君主なのである。そうした君主は伝統的に是とみなされることに従うわけでもないし、それを無視するわけでもない。

要するにこれが正義の実行だと思ふ時機をわきまえている人物、また無視の時期を見定めている人物——必要によって行動する人物なのである。この種の人間には幸運がやって来るわけで、力量が運命の女神を招き寄せ従わせるわけである。

結論を下すでしょう。運は変化するものである。人が自己流のやり方に固執すれば、運と人の生き方が合致する場合には成功するものの、不一致の場合には不幸な結末を見るのである。

私は、用意周到であるよりはむしろ果敢に進む方が良いと考えている。なぜなら、運命の神は女神であるから、彼女を征服しようとすれば、打ちのめしたり突き飛ばしたりすることが必要である。運命は、冷静な生き方をする者より、こんな人たちに従順になるようである。

第二十五章の有名な箇所からの引用で、運命の女神の本性を知ることが力量ある君主とされている。

マキアヴェッリにとって力量と運命は不即不離であって、まだこの時点では平衡関係を保ち、相互に共振し合っていて、一種の円環を豊かに形成していたの思われる。

しかしたとえ両者が平衡・共振関係にあったにしても、ほかならぬ運命を持ち出してきて力量を語るあたり、一見リアリストの面を覗かせながらも、マキアヴェッリの体内には熱いユートピアンの血が流れていたとも考えられよう。

さて『君主論』は端的に言えば、統治の適切な目的と獲得の最良の方法について論じた君主のための人文主義的助言の書（仕官のための論文）であり、国家の存続方法を基本的に論じた書である。国家維持は君主の力量いかに関係してくるのは言うまでもない。

君主は力量を修養しておかなくてはならないわけで、これまででも判るように、それは従来の人文主義者が想定してきた力量とは異なっている。彼らにとって良い君主とは、個人的な道德律、穩健、禁欲が必須とされたが、マキアヴェッリの場合はそれらに加えて、時代の趨勢を見据えた政治的臨機応変さを不可欠とした。そのために悪徳とみなされた武力行使、殺戮などを試みてもよいわけで、美德と悪徳にきっぱり線を引いていた初期の人文主義者とも一線を画していた。

### 共振の瓦解

メディチ家の一時復帰した一五二一年以降も、多くの知識人はメディチ家の支配（君主政）を支持したが、同時期はイタリア諸都市の初期の共和政体にも思索の圏域が広がった時期でもある。

マキアヴェッリの『デイスコルシ』はこの流れを受けて、『君主論』から急転して共和政体を論じたものである。そして彼が範としたのは、ドナート・ジャンノッティやフランチェスコ・グイッチャルディーニが鑑としたヴェネツィアの共和政体ではなくて、レオナルド・ブルーニらが指導的立場にあった十五世紀フィレンツェの共和政体で、彼らの政治的見解を情熱的に、郷愁さえ感じさせるほどに述べはじめた。ブルーニに依拠することは、彼らが言及の対象としたローマのモラリストや歴史家の後継者となることでもあった。

やはり『デイスコルシ』においても、国家の安全な維持と栄光および偉大の達成を中心に論は展開されているが、『君主論』で見たような君主個人によって実現される事蹟ではなく、都市に焦点が置かれている。大都市の完遂した偉大である。

マキアヴェッリは、ローマの偉大は自由な生き方の結実とみなしている（第二巻第二章）。自由を得てこそ人びとは最も力がみなぎり豊かであると言う。共同体全体の自由を説きながら、フィレンツェの共和政の意義を明確にしよとす。都市に偉大さをもたらすのは個人的恩恵でなくて、共通なる利益の追求であり、これは共和国においてのみ可能なのである。

こうした共和国を建設するために市民は思慮や節制や清貧などの徳を身につけるべきであるが、「すべての人間はよこしまなものであり、自由気儘にふるまうことのできる条件が整うと、すぐさま本来の邪悪な性格を存分に発揮」(第一巻第三章)するとの立場に立つマキアヴェッリの人間観はきわめて悲観的であって、こうした人間が力量をもって行動し共同体の利益に役立つためには法の力が必要だと説く。

そして第二巻第十七章へ現今の軍隊における大砲の価値について、また、この点についての通説は正しいか否において、彼は次のように記して章を閉じている。

古代の軍隊が有していたような精神力フレイトを具えている軍隊が大砲を使用するのは有効だが、こういった精神力フレイトを具えていない鳥合の衆が勇敢な敵を相手取って戦う場合は、大砲などなんの足しにもならないのである。

軍隊と大砲の関係を述べているが、これはヴィルトゥとフォルトゥナの関係を暗示しているような気がする。ヴィルトゥのない軍隊は大砲(フォルトゥナ)を使いこなせない、ということである。力量は運命を招き寄せはするが、力量のないときは運命に見放されて、バランスが崩れてしまう。

マキアヴェッリはここに至って、力量と運命の、力量を支点とした平衡力学バランスマツリガクに疑念を投げかけて、ヴィルトゥに驚りを見出しはまいいか。力量と運命の共振に変調が萌したわけである。この変調を彼は、『君主論』同様、運命を主語に据えて、第二巻第二十九章で以下のように論じているが、運命の力学ダイガクに力点が置かれていることが明瞭となってくる。

運命は、みずからなにか大きな働きをつくり出していこうとするとき、自分がさし出す好機を認めて、これを取り入れることのできるような、精神に筋金が入り、才能ブタレも豊かな人物を選ぶものである。これと同じように、運命は世の中に大きな破局をもたらしてやろうと考えるときは、その破局のない手にふさわしい人間を選んで登場させるのである。また、万が一にも運命のしつらえたお膳立てに邪魔をするような人間が現われてこようものなら、この男を殺してしまおうか、あるいはこの人物からなにかしら良い仕事をしうるような能力をすっかり奪ってしまうものである。

もはやヴィルトゥから見たフォルトゥナではなくて、運命論者的にフォルトゥナを支えとしたヴィルトゥである。均衡は崩れた。いや崩壊の萌しを見せはじめたと言った方が正確であろうか。なぜなら第二巻第一章ではフォルトゥナに軍配を上げるプルタルコスやリウィウスに対して、なんとかしてヴィルトゥの威力を主張しているからである。しかし瓦解の音は静かに鳴り始めていた。

ペシミズムを見据えて

マキアヴェッリと交友もあつた当代きつての歴史家フランチェスコ・グイッチャルディーニも、同じく力量と運命について述べているが、彼の見解は歴然としている。彼は『備忘録』(Ricordi 一五二八年―三〇年)という佳品を遺してくれた。グイッチャルディーニは、マキアヴェッリが事物の本性や理念の追究に主眼を置いたのに対し、事物の多様性や偶発性、可触的な日常世界に視線を投げかけた。『備忘録』の文章には人間としての温かみが宿されている。と同時に深い諦念も看取され、いぶし銀にも似た輝きを放っている。

物事を賢く考察する人物は、人事においては運命がこの上なく大きな力を振っているのを認めざるをえない。なぜなら人びとが全く偶発的な事態によって、この上なく大きな「煽り」を喰っているのが見られるからであり、またそれら「煽り」を予見することも、避けることも、人間の力ではできないからである。そして人間の認知能力あるいは注意力が多くの悪い事態を緩和することが出来るとしても、それだけでは充分でなくて、人には幸運がなければ事を成就することは叶わないからである。(三〇)

たとえすべてを思慮と能力に帰して、できる限り運命の力を排除しようと考える人びとであっても、少なくとも次のことだけは認めざるを得ないだろう。すなわち、君がその性質のゆえを以て立派な人物と他から認められている、その性質が重要視されるような時代に巡り合わせた、ないしは生まれ合わせたということが大変重要な役割を果たしたということだけは認めずばなるまい。それはファビウス・マクシムスの例を持ち出してみれば解ることであって、判断に時間のかかる性質であったことが、その大いなる名声をもたらしたのである。ファビウスはハンニバルとの戦争にぶつかることになったのであるが、その戦争では血気に逸ることが不徳策であって、慎重さの方が合っているといった性質の戦争だったからである。そしてまた別の戦争では、全くその逆もあり得るのである。従ってファビウスの幸運は次のことにあったと言うことができる。すなわちファビウスの時代がファビウスの持つていたような性質を必要としていた、そんな時代に生まれ合わせたことになったわけである。それはそれとして、時代の状況に応じてみずから性格を変えることのできる人間は運命の支配をまぬがれる率が高いであろう。もっとも性格などそうやすやすと変えられるものではないが。(三一)

ファビウスについてはマキアヴェッリも『デイスコルシ』第三巻第九章で言及しており、グイッチャルディニと同様な見解を述べている。つまり力量よりも運命に天秤は傾いているとの認識で、運命が力量によって引き寄せられる存在としては捉えられておらず、独立して存在する決定的な因果律のごとくにみなされている。力量があってもそれは時代の流れにうまく乗ったからで、ファビウスの成功も性質による幸運にあるとしている。運命が上からすっぽりと力量を覆ってしまつて、息の根を止めてしまわなければかりである。息苦しさとともに、こう勘案せねばならない時代というものの、そこに生きる人間のペシミズムを見る思いがする。

しかしこうも考えられはしまいか。これまでのどこか高揚した気運がやっと鎮まつて、静穏な雰囲気の中、一歩退いた眼差しで時代を見定める機を得て共振できずに後退し、フォルトゥナが支配的になってきたのである。グイッチャルディニには確かに諦念を垣間見るが、諦念の生み出すある種のゆとりには、ヴィルトゥとフォルトゥナを描き出す歴史家の凝縮した意思が読み取れる。それは歴史を見据える決然とした態度でもある。

あらゆる都市、あらゆる国家、あらゆる王国は死すべきものである。万物はその本性あるいは偶然によって幾度か終焉を迎える。しかし祖国の最期に出遭う市民は祖国の災禍にそれほど心を痛めず、祖国は運が悪かったのだとみなしてしまう。というのも祖国にはとにかく起こらなければかりのことが生じたのであって、そうした不幸な時代にたまたま生を享けた人の方が災難だったというわけなのである。(一八九)

この文章のトーンに生半可な諦念はない。諦念を超えて事態をじっと見つめる歴史家の澄んだ眼差しがあるだけである。

十六世紀の前半がグイッチャルディニによって固定され、ヴィルトゥもフォルトゥナも共振をやめたかのようでもある。とは言え、結局ヴィルトゥは驕り、徳や力量の涵養を主眼とした人文主義も忍び寄る衰えを甘受せざるをえなくなってくる。